

馬場毅編

多角的視点から見た日中戦争

——政治・経済・軍事・文化・民族の相克

集広舎／2015年5月／400頁／5500円＋税



堀井弘一郎

本書の構成

昨年二〇一五年は戦後七〇年、中国側でいう抗日戦争勝利七〇周年の節目の年であった。しかし、日中首脳会談の実現や訪日中国人の増加にもかかわらず、国家間のレベルでも国民意識のレベルでも日中関係は依然として冷え込んだ状態が続いている。そうした中、NIHU（大学共同利用機関法人人間文化研究機構）現代中国地域研究の愛知大学拠点である国際中国学研究センター下の社会・歴史のアプローチ班がおよそ五年間にわたって行った日中戦争史研究会の研究協議や国際シンポジウムなどの成果をまとめた論文集として本書が上梓された。本書の構成は以下のとおりである（本書には各論文に番号は付いていないが、本稿では紙幅の関係で便宜上番号を付けて各論文を示した）。

序文

I 満洲事変前後

（一）万宝山・朝鮮事件——訊問調

馬場 毅

書・裁判記録からのアプローチ

菊池一隆

(2) 遠藤三郎と第一次上海事変——
「遠藤日誌」を中心に 張 鴻鵬

(3) 福建事変時における日本政府の
対応について——「臨検・封鎖問
題」と「抗日的論調取締問題」を
中心に 橋本浩一

(4) 抗戦前四川における少額貨幣と
中国幣制改革 岡崎清宜

II 盧溝橋事件以後

(5) 辻政信とチャハル作戦 森 久男

(6) 「蒙疆政権」の家畜・畜産物統
制政策——獣毛・獣皮取引機構を
中心に 田中 剛

(7) 日中戦争期の満洲における文化
工作および音楽ジャンル観に関す
る考察 葛西 周

(8) 中国華北地域における「北支
軍」映画工作と新民映画協会
張 新民

(9) 治安強化運動と山東抗日根拠地
について 馬場 毅

(10) 汪兆銘の満洲国訪問 一九四二—
三好 章

(11) 戦時下晋綏辺区における紙幣製
造について——洪濤印刷廠の西農
幣印刷を中心に 楊 韜

(12) 抗日舞踊と育才学校の接点——
陶行知、戴愛蓮、吳曉邦の合作
星野幸代

(13) 第二次大戦期中国とカイロ会議
における東アジア秩序の再構想に
ついて——蔣介石日記を基礎討論
として 呂芳上／野口武訊

あとがき 馬場 毅
索引

各論文の概要

(1) 一九三二年七月に吉林省長春泉
で水利争いから生じた中国と朝鮮の農民
の衝突事件である万宝山事件について
は、これまでにも少なからぬ研究の蓄積
がある。しかし、この事件に連動して朝
鮮全土でおこった朝鮮人による在朝鮮華
僑への暴動事件である朝鮮事件について
は、これまではほとんど等閑視されてき

た感がある。本稿は、被害朝鮮人、在朝
鮮華僑、民間日本人、それに日本人警察
の四極から、仁川を中心に事件の真相に
迫ったものである。とりわけ、「いわば
日本人の被害者である朝鮮人がより弱い
立場の華僑を攻撃し、被害者とするとい
う「負の玉突き現象」がおきていた」状
況を実証的に解析した。

(2) 第一次上海事変について、その
発端から停戦協定締結までの経緯を概観
しながら、その発生原因や、参謀本部の
作戦参謀遠藤三郎が果たした役割を中心
に論じている。とりわけ上海に派遣され
た遠藤が、同事変の「ターニングポイン
ト」となる作戦として立案した七了口上
陸作戦が、軍事的な勝利の要因となった
ことを実証的に論じている部分に力点が
置かれている。後に軍略への批判的姿勢
をとったり、戦後は護憲反戦活動を行っ
たりした異色の軍人遠藤の同事変時にお
ける作戦指導の詳細が明らかにされてい
る。

(3) 一九三三年一月、日本の権益
が集中する福建省で、短命に終わったと

はいえ「反蔣反日」や「民主政治の確立」を掲げる中華人民共和国人民政府（福建人民革命政府）が成立した。本稿は、その際、蔣介石国民政府が行った臨検・封鎖や、国民党側による抗日的論調に対して、日本側がとった外交政策について論じている。これまでの同革命政府についての論者の精緻な研究の上に、本稿では同政府成立に際して、この時期の日本の対外政策の課題が「満洲国」の存在を前提とした対外関係の修復にあつたことを背景としつつ、日本側が比較的抑制的、現状維持的な対応をとつたことなどが解明されている。

(4) 国民政府による幣制改革については、従来中央政府レベルの制度史的な研究が多く、貨幣流通を具体的に検討したものはほぼ江南に限られ、かつ本位貨幣である銀貨を法幣に置換する過程までしか明らかにされてこなかった。本稿は、少額貨幣や輔幣券・補助貨幣の流通状況、法幣との結びつきについて、四川省を舞台に具体的な状況を実証的に説明している。とりわけ幣制改革や一九三六

年の輔幣条例の制定による貨幣統合の方策にもかかわらず、法幣と少額貨幣とのレートを安定的に管理することができず、国民政府が中国社会を包摂できないまま日中戦争に突入していった状況が詳述されている。

(5) 辻政信といえは、参謀としての無謀な諸作戦指導や、戦後の特異な行動歴など話題には事欠かない。しかし、辻とチャハル作戦・山西作戦との関係、関東軍の両作戦への関与、日中戦争の趨勢への影響などについては乏しい研究しかなかつた。本稿は支那駐屯軍参謀部の「末席」課員に過ぎなかつた辻が、むしろそのフットワークの身軽さを活かして各戦場や、各軍司令部間を縦横に飛び回つた様子を克明に描きつつ、板垣征四郎師団長の庇護の下、平型関の戦いや太原作戦などが主導されたこと、それらが関東軍参謀らの政務工作と相まって蒙疆政権を生む原動力になっていった経緯を明らかにしている。

(6) 日中戦争勃発後、「蒙疆」において対日協力政権として樹立された一連の

「蒙疆政権」の家畜・畜産統制政策について論じている。当地に出回る畜産物、特に羊毛をはじめとする獣毛類は、アヘンを上回る稼ぎ頭として「蒙疆政権」の財源を確保する重要な役割を果たしており、また重要な軍事物資でもあつた。本稿では、日系商社をまとめて組織した蒙疆羊毛同業会が解散された後、一九三九年二月に設立された蒙疆畜産公司を中心とする買収機構の変遷について、重慶側の対抗策や、抗日秘密結社の策謀とされた「在包頭同志会事件」、駐蒙軍・蒙疆政権・日系企業の間を生じた齟齬などを軸に解明している。

(7) 従来、音楽家の回想録や、内地での音楽統制政策についての研究はあつたが、「満洲」での音楽工作について、音楽ジャンルの観点から専論として扱つたものはほとんどなかつた。本稿では旧「満洲」での音楽を中心とする文化工作の経緯を辿りつつ、日本の流動的な音楽ジャンルの観について、「満洲」における文化帝国主義の観点から明らかにしている。ジャズが「敵性」「退廃性」音楽

とされ、「大東亜音楽」なるものも構想されていく状況の中で、生き残りをかけて音楽家たちが立ち振る舞いながらも、「浄化された音楽」が標榜され、ジャズさえも「国民音楽」に取り込まれていく様子が活写されている。

(8) 華北が日本軍占領下に入った後、対民衆教化宣伝機関として一九三七年一月に新民会が設立されたが、間もなくして新民映画協会が設立された。本稿は、「北支軍」が、「満映」を利用しつつ、同協会に現地の宣撫映画製作機関と、「満映」の華北映画配給機構（「満映」北京出張所）という二つの性格を持たせつつ設立し、同協会が華北映画工作における濫觴期の中心的な役割を担った経緯を明らかにしている。しかし、対中国人吸収工作としての意識に乏しく、日本映画の中国人への浸透は果たせなかった実態を、入場者数や映画館設置の状況、日中の観衆の反応などの資料を豊富に駆使しながら描写している。

(9) 一九四一年から四二年にかけて共産軍側は苦境に追い込まれたが、それ

をもたらした治安強化運動については、従来軍事掃討の側面が重視され、「総力戦」「全体戦」としての理解や対日協力政権側の関与についての研究は不十分であった。本稿は一九四一年三月以降に実施された山東抗日根拠地における五次に及ぶ治安強化運動に焦点をあて、その実相を詳細、具体的に叙述しながら、「勦共」とそれによる治安維持工作の本質を明らかにした。すなわち北支那方面軍の主導下で同運動が軍事攻勢だけでなく、華北政務委員会による政治経済文化工作と総合したものとして展開されたことが検証されている。

(10) 本稿は初めに、汪兆銘政権をめぐる研究史について内外の最新の研究状況を手際よく整理しつつ、論者自らは「仮説」としながらも汪政権を「買弁」の概念で理解する新しい観点を提起している。その上で汪政権が目指した自立性、主体性の表出である「国際関係」の構築のうち、特に「満洲国」との関係に注目し、一九四二年五月の汪の「満洲国」訪問について、その経緯と意味を考

察している。汪政権内部や一部支那派遣軍内でもこの訪問への不協和音があったことが指摘され、また故古厩忠夫らが提起した「グレイゾーン」概念を踏まえての「漢奸」や「傀儡」をめぐる興味深い議論なども展開されている。

(11) 従来特定の抗日根拠地における通貨政策について論じたものは極めてわずかしかなかったが、本稿は晋綏辺区の通貨政策をその紙幣製造の側面から明らかにしようとするもので、辺区の通貨政策全般の構造を究明していくうえで重要な基礎的作業と位置付けられよう。具体的には、当初晋綏地区の興県に置かれた洪濤印刷廠の設立経緯や組織形態、同印刷廠による西北農民銀行発行の紙幣である西農幣の詳細な製造工程、戦時下の困難な環境の中でなされた幾多の技術的発明などが明らかにされた。こうした紙幣製造が辺区の金融財政の重要な一環となり、抗日闘争を支えていったことも示唆されている。

(12) 抗日文芸運動研究において説明が遅れている舞踊の領域で、主として一

九四〇年代、教育家の陶行知と、舞踊家の戴愛蓮および吳曉邦が歩んだ足跡と彼らの相互関係を辿りながら、舞踊史と抗日教育研究、舞踊作品研究、および知識人交流研究とを結合させて、新たな知見を提示している。その際、共産党支援下

で、一九三九年に重慶に「育才学校」が創設され、さらに一九四四年末か四五年初頭に舞踊組の本格的な開設がされたことを叙述の軸にしつつ、同校が開催した音楽会のプログラム内容なども詳細に検討している。重慶知識人らの役割、舞踊と戦災児童教育や救国抗日教育との関わりが明らかにされた。

(13) スタンフォード大学の「蔣中正日記」を駆使しながら、カイロ会議で蒋介石がどのようなスタンスでこの会議に臨んだのかを、前後の国際情勢を踏まえながら論じている。主に依拠する史料が蒋介石の日記という「一面性や主観」性を伴うものであることを自戒しつつ、四大国中の「最弱」国という立ち位置にいた中国が、会議の中でどのように東アジアの戦後構想を主張し一定の成果を得

ていったのか、蒋介石の苦衷にも言及しながらの議論は明解である。中国側から見た同会議の裏舞台を明らかにすることによって同会議の世界史的な意義を再構成し、また中国の国際的地位の大転換の軌跡と意味を明示している。

本書の特色と課題

本書全体を通じた特色と課題を記しておきたい。最大の特色は、書名の示すとおり政治・経済・軍事・文化・民族などの「多角的視点から」日中戦争を捉え、従来の研究が十分には論究できていない研究領域や人物、事象に踏入った分析を行っている点である。NIHUは学問的伝統の枠を超えて国内外にわたる学際的共同研究を推進することをコンセプトに掲げているが、それが十分に生かされた成果と言える。その具体的状況は「各論文の概要」で示したとおりであるが、各論文とも一次史料を縦横に駆使しつつ、日中戦争の政治・軍事的側面のみならず、民族問題、通貨・貨幣政策、畜産物統制、音楽ジャンル観、映画、舞

踊、外交政策など経済・社会・文化史的側面からも、実に多様かつ興味深いアプローチをしている。そこに登場するアクターも、国民党政府、共産党勢力、日本(軍)、対日協力政権、そしてそれらの抗争の下で必死に生きる芸術家、文化人、一般民衆など実に多彩である。こうした手法によって、「侵略」と「抗日」、ある

いは「抵抗」と「協力」で描く単純な革命史観では包摂できない日中戦争のまさに複雑で重層的な構造を衝いた書となっている。日中戦争を総合的に捉えようとする近年の研究動向を踏まえつつ、本書が新たな視点と手法を提示した意義は計り知れない。

第二の特色として、「多角的視点から見た」日中戦争像を提示することで、しかも日中双方の研究者が二十数回にも及ぶ研究会や国際シンポジウムに集い共同研究として議論をした成果をまとめたことによって、日中戦争をめぐる歴史認識問題の相互理解に大きく寄与するものであることを挙げるができる。近年活発な両国研究者による共同研究の道筋を

さらに確実なものとして踏み固めた意義は大きい。「序文」には「本書をあえて世に問う理由」として、「歴史認識の起点になり、戦後の国際秩序形成の一環となった日中戦争についての実相の関心は、決して高くない」こと、特に日本において顕著であることを挙げているが、そうした現下の状況を打開する糸口としても、この共同研究とその成果の刊行は裨益するところがきわめて大きい。日中戦争に関する更なる共同研究の確かな足掛かりとなろう。

本書の課題についても指摘しておきたい。それは各論文がそれぞれ斬新な視点を持ち、きわめて有意義なものであるだけに、全体を俯瞰した総論のようなものがあれば、いっそう有益な議論を提供できたのではないかと惜しまれる点である。いわば精緻な「虫瞰図」はあっても、全体を見渡す鳥瞰図がない読後感が残る。せっかく「多角的視点から見た」としているのであるから、新たに拓いた研究地平から日中戦争について何が見えてくるのか、あるいは「政治・経済・軍

事・文化・民族の相克」としているのであるから、それらの何がどう「相克」しているのか、「考えるヒント」のようなものでも提示してくれるとありがたかつたと一読者として思う。付言するならば、「国民レベル」での関心を高めようとする本書においては、一般読者の理解を助ける工夫がもう少しほしかった。各論文が詳細に地理的空間をおさえながら論述しているが、一般にはあまりなじみのない地方を扱う際には関係地図があれば大いに理解を助けよう。難解な経済用語はやはり説明がほしい。中文・英文資料の引用は、訳文（要旨）を付けたり、もう一步踏み込んだ意識をしたりしてもよかつたように思える。

とはいえ、厳しい日中関係が続く中で本書が刊行されたことは誠に時宜を得たものであった。日中戦争を多面的側面から照射して「日中戦争の実相を明らかにする」という本書の試みは、今後の研究の進展と国民の理解にとって、一つの新たなベースキャンプを提供するものであることはまちがいない。この研究グルー

プの次なる研究成果の公表が大いに待ち望まれる。